

一般演題8-2

当院における過去12年間の高気圧酸素治療の現状

河津好宏 三谷昌光 吉里美智也 牧山由紀
八木博司

特定医療法人 八木厚生会 八木病院

【はじめに】

当院は、福岡市にある127床の救急告示病院であり、1971年に第1種装置 1984年には第2種装置導入し2014年末までに、6,685例10,0165回の治療を行ってきた。

今回は平成15年1月から平成26年12月まで12年間の高気圧酸素治療 (HBOT) の疾患別症例数を4年ごと前期・中期・後期に分け、検証したので報告する。(図1)

【結果】

12年間の症例数計は1,980例であり、前期717例 中期582例 後期681例であった。

疾患別でみると、CO中毒の症例数は多く、ほとんどは近くの救命救急センターからの紹介である。救急隊からの直接搬送は少ないため、救命救急センターとの連携も重要であるが、救急隊への直接搬送のお願いが必要である。

減圧症は前期24例中期27例から後期42例で増加、レジャーダイビングから帰宅後、体調不良が出現しインターネットで調べ心配になり、当院に受診される例が増えた。しかしその中には、ネット上にある減圧症の記事を過剰に、又は間違っ理解し来院するケースが多くあった。

骨髄炎は前期49例から後期114例、近隣の施設 (HBOTを高く評価) からの紹介が増えた。

突発性難聴は前期73例 中期50例で減少したが、当院の高気圧酸素治療室がTVで紹介されると後期には128例と増加した。しかし当院には耳鼻科がないため紹介元施設 (耳鼻科) と連携をとり、HBOTを行っている。

背髄神経疾患は中期25例から後期8例、ガス壊疽は中期21例から後期7例、ともにHBOTに理解のある紹介元医師転勤のため減少。

当院の得意とする末梢血管傷害・難治性潰瘍は前

期143例 中期119例 後期141例で症例数多い疾患である、詳細は、急性動脈閉塞は減り、紹介による難治性潰瘍は増加した。

また熱傷等の疾患の減少傾向にある。

【考察】

当院のような127床の病院では、他院からの紹介に頼る必要があり、事実多くは他院からの紹介であった、今後とも安定した治療件数確保するためにも、近隣の施設への営業・啓蒙の必要性である。

また減圧症だけでなくインターネットからの検索からの来院も多く、ホームページの重要性と正しい情報掲載必要を感じた。

高気圧酸素治療 疾患別症例数	前期 (H15-H18)	中期 (H19-H22)	後期 (H23-H26)	計
CO中毒	44	74	59	177
減圧症	24	27	42	93
脳血管傷害	85	31	11	127
低酸素脳症	33	27	20	80
末梢血管障害・難治性潰瘍	143	119	141	403
イレウス	92	72	67	231
ガス壊疽	16	21	7	44
熱傷	26	12	13	51
背髄神経疾患	23	25	8	56
骨髄炎	49	46	114	209
突発性難聴	73	50	128	251
スポーツ外傷	0	12	14	26
その他	109	66	57	232
計	717	582	681	1,980

図1